有田先生の思い出

細谷　行輝

私が有田先生と最初にお会いしたのは，20 年以上前の学会の折であっただろうか。当時既に私は真鍋先生と親しくさせて戴いていたので，そうした関係から有田先生にお目にかかったような気がする。多言語に通じたその該博な知識は，著書などから，夙に存じ上げていたが，初対面の印象は，「ソフト」であった。表情，語り口がソフトであり，風貌もどこか私の実父に似ており，初めから，打ち解けていったような気がする。話題は，私がコンピュータにも接していたためか，「機械翻訳」にも及び，機械翻訳が真の意味で実用化されるとしたならば，その理論は関口の意味形態論しか無いのではないか，と言われた点，コンピュータのプログラマーとしても活動していた私の観点からも大いに頷けた。いずれ，私が関口の意味形態論を自動翻訳ソフトに移植したい，と述べ，その場を別れたような気がする。

その後，有田先生が，早稲田大学を定年退職されると，私が 30 歳前から細々と続けていた「冠詞研究会」の例会に，殆ど，毎回，平塚から泊りがけで参加して下さった。こんな小さな研究会に高名な先生が毎回のように参加されるのは，実力主義を貫いた関口存男の影響であったのだろう。つまり，形式に囚われず，小さくとも，有意味な研究会と考えられたのであろう。

有田先生は，定年後も，マンションの一室に書斎（職場）を構え，毎日，通っておられたようである。定年後，手持無沙汰になるのではなく，自分の書き

たいものを自由に書ける，という喜びが先生のお顔には溢れていたように思われる。何かの機会に上京した折，有田先生はこの書斎に私を導き入れ，宿泊までお許し下さった。学問に一生を捧げた学者の吐息に触れるようで，忘れがたい記憶として，今も私の脳裏に残っている。

有田先生は，私の自堕落な研究生活に対しても，警鐘を鳴らすべく，親身な助言をいくつもして下さった。通常の見方は，私が「私」を捨て，時間にかまわず，研究生活に没頭することに対して，敬して遠ざけるとしたものであるが，有田先生は違っていた。「細谷さんは意思が弱いので自堕落な研究生活を送っている」と見抜かれ，私は返す言葉が無かった。見抜かれながら，有田先生亡き後，今なお自堕落な研究生活を続けている。ここまで来たら，自堕落な研究生活に徹底したい，と今は開き直っている。天国の有田先生からお叱りの言葉をまた戴きたいものである。